

収蔵館ニュース

第19号
(改題通算45号)

K U R U M E C I T Y

2023.3

● CONTENTS

- ・新収蔵資料紹介
- ・六ツ門図書館展示コーナー
- ・守り、伝える
- ・活かし、伝える
- ・トピックス
「久留米藩の豪商に思い馳せる ～海山名所図会 里帰り」



海山名所図会 巻1及び巻2(部分) 作者不詳 江戸時代中期
九州の北部と南部を巻1、巻2に分けて描いている。有明海の北に久留米城がある。

新収蔵資料紹介

豪商の絵巻でたどる 江戸時代の船の旅

久留米藩随一の豪商・手津屋正助しよすけが所有した全5巻の航路図です。全長は5巻あわせて約25mに及びます。主に日本列島の太平洋側が描かれ、全体では東北から江戸、大阪を経て九州にいたります。

それぞれ内容を見ると、各地の城郭や神社仏閣といった名所のほか、所々に集落を描き、距離や航海上の注意点を文字で記した箇所もあります。なお、表現や表記の異同、押印の有無、表紙の違いなどから、巻1と巻2、巻3と巻4がそれぞれ対をなし、巻5はまた別に作成されたものと考えられます。

実際の日本列島は起伏に富み、海岸線が複雑に連なります。一方、この絵巻では、その独特の地形が長い紙面に巧みに収められ、山や海が色鮮やかに表現されています。江戸時代の手津屋の人々が、絵巻を手に航海の旅程を見て楽しむ様子が想像されます。

*関連記事(12ページへ)

新収蔵資料紹介

2022.2
▼
2023.1

寄託から寄贈へ

久留米藩大庄屋の古文書群

「上野健三郎家資料（第1次）」

上野家は天正年間以来、400年
余り続く旧家で、江戸時代には山本
郡柳坂組の大庄屋を務めました。同
家に伝来した近世から近代にかけて
の資料は、これまで8次にわたって
寄託（第1次）、寄贈（第2～8次）
されています。

そのうち、第1次として平成8年
度より寄託を受けていた942点が
寄贈されました。内容の年代は江戸
時代前期から昭和戦後期に及びます。



柳坂組の「御立山」（藩有林）管理や年貢徴収に関する大庄屋関係資料

《大庄屋の役割と文書》

資料群の中核となる近世の古文書
には、上野氏を大庄屋役に任ずる辞
令や、その職務に伴って作成または
受理された書類が伝わります。内容
をみていくと、大庄屋として藩法の
伝達、年貢徴収、村の願書の取次、
訴訟の調停など、村々の支配のため
職務を全うする上野氏の姿が浮かび
上がります。

なかには、全藩規模に及び約5万
人が蜂起した宝暦一揆について、庄



宝暦一揆関係の古文書（部分）
宝暦4年（1754）5月「乍恐奉願上覧」

屋からの報告書や、百姓たちからの
詫ひ状が残り、山本郡柳坂組の大庄
屋に対する農民の闘いの推移を詳し
く知ることができます。

《写真にみる上野家の近代》

近代以降の資料は写真が中心で、
家族の幼少期や人生の節目の肖像写
真、卒業式や結婚式、同窓会の集合
写真などがあります。

また、地域に関わるものとして、
新嘗祭耕作地、須佐能袁神社の神幸
行事を撮影した写真があります。前
者は、上野雷八が大正3年（1914）
の新嘗祭で献上する粟の耕作者に選
ばれた時のものです。後者は、行列
の様子や境内のにぎわいを写してい
ます。同行事は昭和59年に市の無形
民俗文化財に指定されており、その
歴史を示す資料としても貴重です。



須佐能袁神社の神幸行事

「あそびながらじをおぼえる」
楽しく遊び、楽しく学ぶ

「堺家資料」

昭和の初め頃までは、子どもの遊
び道具といえは多くは、独楽や凧、
おはじきやお手玉といった純粋に遊
びを楽しむものでした。

知育玩具が初めて登場したのは、
1950年代頃と言われています。
1970年代に入り、日本に教育
ブームが訪れると、教材のように勉
強をさせる目的で作られたものが多
くなりました。

堺家で使用されていた積み木に
も、ひらがな五十音が書かれたもの
や、「あそびながらじをおぼえる」
と箱書きされたひらがなカードがあ
ります。



知育玩具のひとつ 「あそびながらじをおぼえる
ひらがなカード」

村の現状調査から 地域政策の将来を考える

「三浦家資料（第2次）」

三浦家は、生葉郡屋部村の阿南大膳正が筑後居住の初代と伝えられ、元和9年（1623）に竹野郡分地村に移り住んだと言われています。5代の時に三浦に改称し、6代以降、蔵八村の庄屋や下見役、川筋見廻り役などを務めました。

平成17年度には、幕末から昭和戦前期の田主丸町及び周辺の村の様子を窺い知ることのできる古文書や典籍類の寄贈を受けました。今回、第2次として寄贈された資料群は、田主丸地域の郡是や村是といった郡の行政に関するもの、福岡県の産業経済の統計に関するものなどです。



「郡町村是附録」(左) 「福岡縣生葉竹野郡是」(中) 「福岡縣竹野郡船越村是」(右)

郡町村是は、明治20年代から大正時代にかけて、全国の郡町村で、現状と沿線を調査し、将来に向けた目標や指針をまとめたもので、当時の地方の地域施策の一旦を知ることができる貴重な資料です。

「福岡縣生葉竹野郡是」は、全国的に行われた町村是構想の最初の調査として、明治25年（1892）から同27年にかけて生葉郡1町9村竹野郡1町6村の合計17町村を対象に、郡長である田中慶介統轄のもとで調査編纂されました。

両郡の良好な自然条件からもたらされる収益状況を分析し、提言として、殖産興業の策は、歳月をかけて実験や応用を繰り返すべきことなどが述べられています。



「福岡縣生葉竹野郡是」
殖産興業の策について書かれた箇所

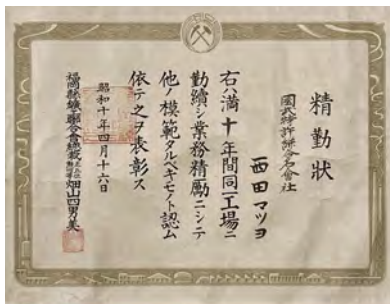
久留米 紉産業の発展を担う 近代の手織り職人

「西田家資料」

久留米紉製作を家業とした西田家に伝来した資料群で、内容は主に家業関係と家族の出征関係で構成されています。特に、機織りの名手として知られた西田マツヨ氏ゆかりの品々は、近代久留米紉産業の発展・最盛期の一端を伝えます。

マツヨ氏は、明治18年（1885）に御井町の織屋に生まれ、14〜15歳頃より紉を織り始めました。その腕を見込まれて西田家に嫁ぎ、40歳頃には、紉業界一の大手である國武特許拵合名会社に先生格として招かれるほどの腕前でした。

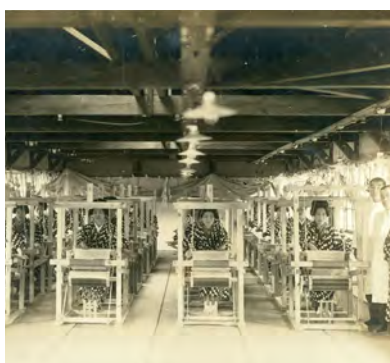
「精勤状」は、マツヨ氏の國武特



國武特許拵合名会社勤続10年の精勤状。上部中央には工具、周囲には煙突や立ち並ぶ工場がデザインされている

許拵合名会社での勤務が満10年を迎えた際に、福岡県鉦工聯合会総裁から贈られたもので、「模範タルベキモノト認ム」とあります。同聯合会は、大正15年（1926）に鉦業団体を中心に結成されました。労務者表彰、安全問題講演会、技術講習会などの事業を行っていました。

國武特許拵合名会社は、最盛期には約600名の工場従業員と2千人にのぼる自宅織工が在籍した、久留米紉の生産拠点です。工場内部の写真は、整然と並んだ織機と、同じ柄の制服に身を包んだ織子たちの姿を写しています。きりりとした表情から、機織りの仕事に誇りをもって真剣に取り組む織子たちの意気込みが伝わってきます。



部屋の奥まで織機が並ぶ國武拵工場内部

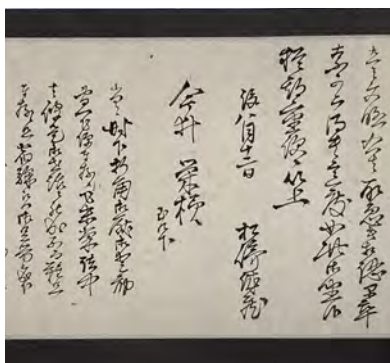
激動の時代を駆け抜けた 久留米の志士の姿を伝える

「松崎家資料」

旧久留米藩士松崎家に伝来し、幕末久留米藩海軍の中堅人物であった松崎誠蔵（1829～1869）関係の古文書を中心とする資料群です。

松崎誠蔵は、藩の近代化に貢献しながら、政争に破れ切腹させられた殉難十志士の一人です。この十志士の関連資料は、所在を追えないものも多く、また、これまでまとまった文書群としてはほとんど確認されませんでした。そのような中で、本資料群は誠蔵の久留米藩における役割や当時の政治情勢などを解明する手掛かりとして重要です。

卷子装「千載史料 第廿二巻 松崎誠蔵／今井栄」



卷子装「千載史料 第廿二巻 松崎誠蔵／今井栄」(部分)

松崎誠蔵／今井栄（写真）は、文久2年（1862）閏8月12日に、京都の松崎誠蔵が、江戸にいる今井栄に宛てた書状です。

この時期の政治状況ですが、同年2月に和宮と将軍徳川家茂の婚礼が行われると、朝廷は幕府に対して政治改革を強く求めるようになり、公武合体を推進した薩摩藩主の父・島津久光が江戸への勅使に随行します。その結果、徳川慶喜が将軍後見職に、松平春嶽が政事総裁職に就任するなど、幕府が朝廷の意向を受け入れました。

誠蔵は勅使一行に従っていたように、閏8月6日に江戸から京都に到着しました。その後5日間で把握した京都の政治情勢を、江戸の今井栄に伝えました。書中では、京都には諸藩の重役などが多数滞在し、朝廷への周旋活動（手入）が盛んであると報じています。

幕末の政治的・軍事的緊張のなか、在京久留米藩士が、他藩の動向や朝廷内の公家の方針齟齬など、細かに情報を収集し、藩主がいる江戸に報告していたことを示す貴重な史料です。

幕末維新の激動の時代にも 和歌のたしなみ

「和歌短冊三枚」

それぞれの和歌の作者である水野正名（1823～1872）・稲次成令（1851～1932）・稲次正足（？～1895）は、いずれも幕末維新期の久留米藩において政治や経済に尽力した重要人物でした。久留米にゆかりの作品であることから、東京在住の古美術品蒐集家より本市に寄贈されました。

3人の和歌には、政治や社会が目まぐるしく変化した激動の時代にあっても、ふと移り行く季節を感じ、それぞれに思いを馳せた、彼らの細やかな一面を垣間みることができま



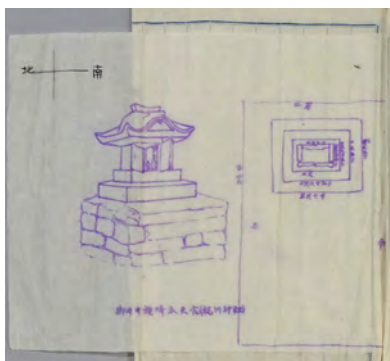
和歌短冊三枚（左から 水野正名・稲次成令・稲次正足の作）

御井町水天宮の近代 受け継がれる地域の信仰

「御井町水天宮関係資料」

御井町水天宮の惣代の家に伝来した資料群で、次のような同宮の由緒と歴史を良く伝えていきます。

同宮は、天保5年（1834）に旗崎に勧請されました。明治時代になると、政府による神祠仏堂整理に伴い、路傍散財取調が行われますが、この時、水天宮堂の据置の出願を遺漏してしまいます。同18年、出願を行い、存続を許可されました。同時に水天宮堂の維持管理のため、祠掌を定め、醸金の運用収益を祭典や修繕に充てることになりました。この間、明治17年に石祠が建立され、現在も旗崎溜池の堤に鎮座します。



御井町水天宮 祠の図面

インテリアコーディネーター、 美術品蒐集家、表具師・岡来蔵

「岡来蔵関係資料」

明治期から昭和戦後期にかけて、日吉町に表具店を構えた岡来蔵（号「芝玉堂」）、1895～1953）の旧蔵品を中心とする資料群です。内容には、江戸時代の久留米藩窯の陶器や御用絵師三谷家の絵画、岡と親交の深かった芸術家の作品や書簡などがあります。

《石橋正二郎と画家をつなぐ》

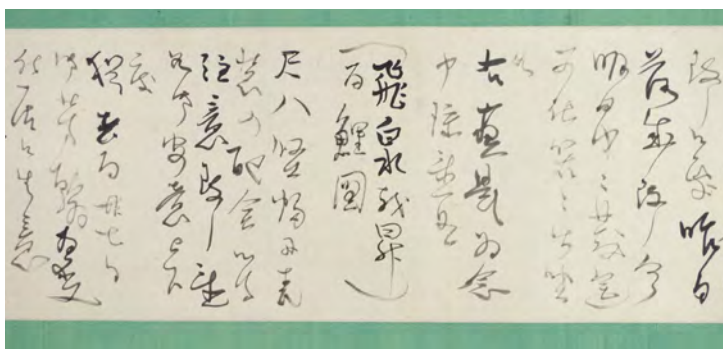
昭和5年（1930）、秩父宮同妃両殿下が久留米を訪れ、石橋正二郎邸に滞泊します。正二郎は当時、日本足袋株式会社社長、翌年ブリヂストン株式会社を創業する新進の実業家でした。この時、石橋邸の



「御泊所奉仕當時ノ職員一同 岡芝玉堂」。前列 右から2人目が岡来蔵

室内装飾のコーディネイトを任せられたのが岡来蔵です。その成果は

「秩父宮同妃両殿下御滞泊記念寫眞帖」に収められています。特に室内を飾った絵画は、この時のために制作を依頼したもので、蒐集家でも知られる正二郎の初期コレクションを形成します。富田溪仙（1879～1936）や筆谷等観（1875～1950）から岡に宛てた書簡が伝わり、正二郎の依頼を画家たちになぐため、奔走した岡の功績を映し



富田溪仙書簡（部分）。書中で今回描いた作品の名称は「飛泉を昇る鯉図」であると伝えている

出します。

《芸術家との親交》

岡は表具師として美術品と接する一方、その蒐集家でもありました。日常的に芸術家と交流し、京町出身の洋画家・坂本繁二郎（1882～1969）や荘島町出身の鍍金家・豊田勝秋（1897～1972）と親交がありました。



坂本繁二郎作「放牧一馬」

・坂本繁二郎「放牧一馬」

岡の依頼を受けて繁二郎が制作したものです。ただし、納品されたのは岡の没後で、作品には繁二郎の詫

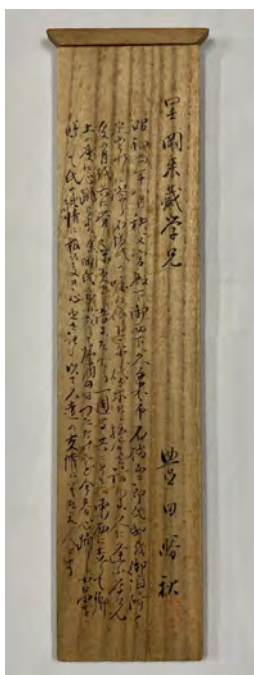
びの手紙が添えられています。

繁二郎は「馬の画家」と呼ばれるほど多くの馬の絵を描きました。本作は水彩画で、絵の具の特性を生かした複雑な色味を用い、馬の体を立体的に表現しています。

・豊田勝秋「鍍銅花器」

岡は豊田の「鍍銅花器」2口を所有していました。1口は昭和4年（1929）に制作され、同6年の無型展に出品されたものです。無型とは、大正15年（1926）に結成された工芸家の団体で、豊田は結成から参加し、工芸美術の地位向上に尽力しました。

もう1口は、岡のために制作されたものです。作品を収めた箱の蓋裏に、その経緯が良く記されています。豊田は昭和5年（1930）に「学兄」と慕う岡との再会に感動し、翌年制作した作品を「久遠の友情にそなえん」として岡に贈りました。



昭和6年作鍍銅花器の箱書き

原稿や校正からたどる 古川柳研究家の歩み

「西原柳雨関連資料」

庄島町出身で、日本三大古川柳研究家の一人である西原柳雨（1865～1930）が作成・収集した資料群です。柳雨は43年間の教壇生活の傍らで古川柳の研究を続け、その大家として名を馳せました。

資料群は、柳雨が手掛けた川柳関連書籍の原稿・校正綴り、研究資料として蒐集したとみられる、江戸時代後期から明治時代の写本や版本など計54点から成ります。原稿の内容は、古川柳の歴史に関する論考、川柳句の紹介と解説、川柳作成に必要な用語や語句の説明などです。柳雨の研究テーマの一つは、川柳句の表

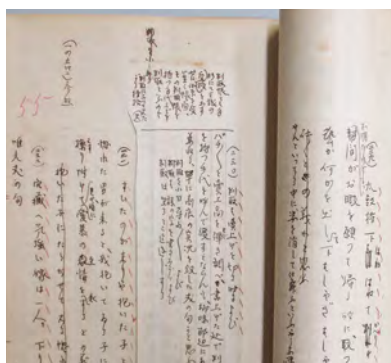


柳雨が手掛けた原稿・校正綴り

現から、東京の芸術文化と川柳との関係性を紐解くことでした。

校正綴りは、大半が下摺りをとじたものですが、「誹風柳樽講義二篇第一稿」と題された冊子の中身は手書きの原稿で、初篇・二篇を1冊にして刊行する構想でまとめられています。本文内容はこの第一稿を踏襲しつつ、刊行計画は変更され、昭和5年（1930）に初篇のみが『誹風柳多留講義初篇』（岩波書店）として刊行されました。

また、柳雨が教員時代に自身の教材として編集したと思われる「教科書用植物学原稿」も残り、動物・植物科の教員としての一面を垣間見ることが出来ます。いずれも柳雨の業績や活動をたどるうえで重要な資料です。



『誹風柳樽講義二篇 第一稿』（部分）。書込みから推敲の過程がうかがえる

新収蔵資料一覧

日付	資料名	点数	氏名	区分
3・1	吉田二八郎家資料	2	吉田二八郎	寄贈
3・1	木下昌博家資料	24	木下昌博	寄贈
3・1	一七七年式防空用防毒面	1	匿名	寄贈
3・1	釘抜紋鬼瓦	1	匿名	採集
3・31	西田家資料	35	柿本富久子	寄贈
4・18	上野健三郎家資料（第1次）	942	上野健三郎	寄贈
4・19	岡来蔵関係資料	32	岡テル子	寄贈
4・25	九州日報	3	匿名	採集
5・10	戦時切手資料	2	匿名	寄贈
7・4	海山名所図会	5	渡邊慶子	寄贈
7・8	和歌短冊二枚	3	田堀雅尚	寄贈
7・13	高松凌雲書簡及び宇治田東畷書簡	1	匿名	寄贈
7・26	御井町水天宮関係資料	3	平田洋一	寄贈
10・13	三浦家資料（第2次）	10	三浦光	寄贈
12・19	堺家資料	23	堺富美子	寄贈
12・28	西原柳雨関連資料	54	井手香織	寄贈
1・12	手拭い ふるさとを唄おう	1	匿名	採集
1・31	松崎家資料	25	松崎誠	寄贈

六ツ門図書館展示コーナー

新収蔵資料紹介 はじめました

《新収蔵資料紹介コーナーとは》

久留米市では、歴史、民俗、美術などの各分野にわたって、本市の歴史文化に関わる資料を「文化財収蔵資料」として収集しています。これまで寄贈や寄託、あるいは購入によって収集した資料数は、9万件以上へのぼります。収集した資料は、後世に確実に引き継ぐとともに、展示や研究に活用するため、整理を行い、目録を作成しています。

新たに収蔵資料に加わった資料をいち早く公開するため、令和4年4月、六ツ門図書館展示コーナーの一角に「新収蔵資料紹介コーナー」を新設し、月替わりで展示を行っています。

《令和4年度の展示》

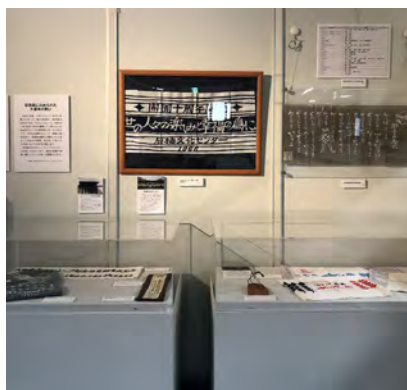
4月には本市に県内初の高等女学校を創設した教育者・細見保ほそみ たもつの伝記関係資料、5月には渡米して実業家

令和4年度 新収蔵資料紹介 テーマ一覧

月	テーマ
4月	学校創設に尽力、教育者・細見保
5月	写真のなかの牛島謹爾
6月	記念品に込めた久留米の思い
7月	戦時資料1 久留米から戦地へ
8月	戦時資料2 戦時下の久留米
9月	久留米絹産業の発展を担う、近代の手織り職人
10月	幕末維新期の和歌短冊 ～水野正名、稲次成令・正足～
11月	表具師・岡来蔵関係資料1 芸術家との親交 ～坂本繁二郎、豊田勝秋～
12月	表具師・岡来蔵関係資料2 書簡集 ～石橋正二郎と画家をつなぐ～
1月	御井町水天宮の近代 ～受け継がれる地域の信仰～
2月	家族の生活、成長のために ～家政学教本と知育玩具～
3月	近代田主丸地域の産業振興計画 ～郡是・村是～

として成功した「ポテトキング」と牛島謹爾きんじの写真アルバム、6月にはくるめ水の祭典など昭和30～50年代に市内の催事で配られた記念品を公開しました。

7・8月は「終戦の日」の時期にあわせて、平和の尊さを考える機会として、戦時資料をテーマにしました。9月から3月の展示資料につい



6月度 新収蔵資料紹介コーナー展示風景



9月度 新収蔵資料紹介コーナー展示風景

〒830-0031 久留米市六ツ門町3-11
TEL 0942-27-9281
FAX 0942-27-7281
くるめりあ六ツ門5階

ては、本号2～5ページでも紹介しています。

2月には昭和戦後期の子ども用の玩具、3月には田主丸地域の郡是や村是など近代の行政関係資料を展示しました。

開始からまだ1年ですが、多岐にわたる収蔵資料から、久留米の歴史文化が持つ多様性を少しでも感じていただけたら幸いです。

*

展示替えの予定については、随時、市ホームページでお知らせします。

久留米歴史物語

「見つけ守り、活かし伝える」

会期：令和4年7月30日（土）
～10月4日（火）

市内各地には、筑後川により育まれた歴史文化を背景とする様々な歴史物語（ストーリー）が広がっています。そのストーリーは多くの歴史遺産を生み出し、私たちは市内の至る所で見つけることができます。

それは神社や石造物、古墳、祭り、古文書、習俗・習慣など多岐に及び、これまで地域の方々によって大切に守り伝えられてきました。展示では、本市の歴史文化と保護の歴史、市民とともに歴史遺産を保存活用していくための取組みについて紹介しました。



展示会場の様子

《展示の内容》

今回、古代から現代まで幅広く、出土品や工芸品、様々な歴史資料を展示しました。久留米市の衛星写真、「久留米市鳥瞰図」（吉田初三郎、絹本原画）、「小銅鐸」・「権現塚古墳の人物埴輪」・「隈山2号墳の山柵玉」（いずれも市指定文化財）、「小野川才助化粧まわし」・「鬼夜の大松明」（実物の1/3レプリカ）、藍胎漆器、久留米緋、発掘調査で実際に使われる道具や図面などです。久留米の歴史を振り返り、そして市民の皆さんに「まちの宝もの」の情報提供を呼び掛けました。

《久留米市文化財保存活用地域計画》
本展では、久留米市の文化財保護行政における今後の指針となる「久留米市文化財保存活用地域計画」の



沢山集まった「まちの宝もの」情報

紹介も行いました。この計画では、

歴史遺産を活かし伝える新たな仕組みとして「筑後川遺産」登録制度を設けています。市民の皆さんが大切に伝え残したいと思うモノやコトを歴史遺産と呼び、共通のストーリーでつながる歴史遺産を「筑後川遺産」として、地域とともに保存・活用していくための制度です（地域計画の詳細は市ホームページ参照）。

《ワークショップ》

10月にはワークショップを開催しました。通町界隈を歩きながら歴史遺産を見つけ、歴史ストーリーを考えました。指定や登録された「文化財」だけではなく、地域で昔から伝わるもの全てが歴史遺産です。その遺産に気づいたとき、「見つけ守り、活かし伝える」物語が始まります。



まち歩きの様子

久留米大学・久留米市共催

「久留米俘虜収容所の風景」展

会期：令和4年10月9日（日）
～11月7日（月）

久留米市では、久留米に設置された俘虜収容所について、また、ドイツ兵捕虜と久留米のかかわりについてより多くの方に紹介するために、資料の収集や公開・活用などを行っています。

今年度は、収容所での生活や収容所での娯楽など5つのテーマを設け、久留米大学御井図書館が所蔵する写真や楽譜などの資料と、久留米市が所蔵する関連資料の展示を行いました。本展示会は、久留米大学と久留米市による初の資料展共同開催となりました。



本市所蔵のレリーフ（左）と煙草入れ（右）。
どちらも捕虜が制作した

むかしのくらし展

くらしと道具のいま・むかし

会期：令和4年12月20日（火）
～令和5年3月31日（金）

むかしのくらし展は、世代を問わず親しみやすい「くらし」をテーマに、近現代の収蔵資料を紹介する企画展です。

令和4年度は「くらしと道具のいま・むかし」と題して、「装つ」「食べる」「住まう」「遊ぶ」「学ぶ・働く」「まちのつながり」の6つのコーナーを設けました。コーナーごとに、江戸時代や明治の頃から使われていた様々な道具が、日本の近代化や技術革新によって、手軽で使いやすくなり、人々の暮らしも豊かになっていったことを紹介しました。



展示会場の様子



学校見学の様子

来場者からは、「アイスクリームボックスを見ることができるとは！小学生の頃に毎日通った駄菓子屋のおばちゃんの良い笑顔を思い出した」「亡くなった父はアサヒコーポレーションに勤めていて、毎日この服を着て自転車で仕事に行っていた。すごく懐かしい」など嬉しい感想もたくさんいただきました。

六ツ門図書館展示コーナーには、昭和30年代の家を再現した「昭和のおうち」があり、むかしのくらし展の時期には小学生が社会科の授業で見学に来ます。文化財サポーターの方々が道具の使い方や暮らしの移り変わりの説明を行うと、子どもたちは初めて見るダイヤル式の黒電話や、リモコンのない白黒テレビに目を丸くしていました。

六ツ門だより

例年、小学3年生が授業の一環として「むかしのくらし展」を見学しにやって来ます。1、2世代前の暮らしを学び、時代の移り変わりを知ることが歴史学習の入口であると引率の先生から伺いました。

児童の皆さんは、久留米で実際に使われていた「むかし」の道具を見学しながら、昭和30年代に小学生だった文化財サポーターの方々から説明を聞きます。一生懸命、元気いっぱいに学んでいて、展示会場が1年で最もにぎやかになる季節です。

ただ残念ながら、この2年間は、コロナ禍で団体見学の受入れを中止していましたが、人数制限を設けたうえで、ようやく再開することができました。以前は100名ほどがにぎやかに見学していたこともありましたが、今年度は一度に受け入れる児童数を35名ほどにしました。

また、希望する学校向けに、文化財サポーターの方々による説明のオンライン授業や動画配信を行い

ました。それまでカメラの前に立つ機会がほとんどなかった文化財サポーターの方々や撮影する職員にとって、児童の反応が直接見えないことや、説明を細切れに進めることはとても難しいものでした。けれども、力を合わせて取り組み、良いものをお届けできたのではないかと思います。

まだまだ手探りしながらではありますが、見学が充実したものになるように、また久留米の歴史ファンになってもらえるように、今後も関係者一同がんばります。



炭火アイロン、電気を使わない

配信動画「むかしのくらし」より
久留米市公式 YouTube チャンネルで、ぜひご覧ください！

守り、伝える

姿を現した当時の綱模様 修復後の姿をお披露目

平成28年度に善導寺小学校より移管された「小野川才助化粧まわし」の修復を、令和3年度に行いました。令和4年度に六ツ門図書館展示コーナーで開催した企画展「久留米歴史物語」で、修復後の姿を公開しました。

小野川才助（3代）は、山本郡高畑村（現善導寺町）出身で、幕末〜明治初期に活躍した久留米藩お抱え力士です。化粧まわし姿の錦絵が伝わり、その勇猛さを感じさせます。



化粧まわしの展示風景

《修復前の化粧まわし》

修復前は、昭和28年（1953）の筑後川大水害の被害による泥汚れのほか、全体的にほつれ、カビ、虫食いや裂け、特に金糸のほつれが激しく、このままでは、資料の劣化が進むことが懸念されていました。

《修復の内容》

①全体のクリーニング
表面や生地の間に入り込んだ埃等を刷毛や小筆などを用いて取り除きました。



クリーニング作業の様子

②全体の折れ皺緩和

湿した不織布を皺部分に当て、適度な重しを乗せてプレスしました。

③金糸刺繍部分の整形

金糸がほつれ、綱の形状を成していなかった箇所を中心に、意匠の復

元作業を行いました。

整形には、楮紙という和紙に、布海苔（布糊）を付けたものを用いました。いずれも古くから日本で使われてきた材料で、文化財の修復作業には欠かせません。修復の履歴をたどることができるよう、作業箇所はすべて記録に残しました。



金糸の修復作業の様子

《修復を通しての発見》

クリーニングの結果、糸の損傷が激しかった覆輪部分にみられた黒い筋状のものは、汚れではなく、銀糸もしくは金属糸を使って施された模様であったことが新たにわかりました。

本来の姿に近づいた資料を、今後適切に保存し、公開・活用を進めていきます。

受け継ぎ、そして未来へ 紙の剥がれの応急処置

古文書の整理をしていると時折、紙の継目が剥がれているものがあります（左図参照）。そのまま収納せず「でんぶん糊」を水で溶き、筆を用い、糊付けします。スティック型の糊では紙への刺激が強すぎるためです。継目で文字が分かれていますこともあり、その際は文字がずれないように、特に慎重に貼り合わせなければいけません。その後、よく乾燥させ中性紙の封筒に収納します。

本市所蔵の古文書は江戸時代のものが多くを占めています。当時の人々が紙を継ぎ、記した書状に「糊付け」という応急処置を施しながら、永久保存していくのです。



継目が剥がれた書状

活かし、伝える

久留米大学生2名が

学芸員の知識と技を学ぶ

学芸員の資格取得のためには現場での実習が必修です。令和4年度は、8月17日から25日のうち7日間の日程で実施し、久留米大学の学生2名が実習にのぞみました。

実習では幅広い分野に取り組みました。〈歴史資料の取扱い〉では、古文書や古写真などを調査するにあたって確認すべき事項などを、実際に資料に触れながら学びました。

また、〈展示実習〉では、六ツ門図書館展示コーナーや有馬記念館で



実習の様子（歴史資料の取扱い）

の展示会開催に向け、資料の梱包や解説文の作成など、現場ならではの実技を経験しました。

そして、〈広報実習〉では、〈展示実習〉で学んだことをもとに、有馬記念館公式フェイスブック用に展示品紹介の投稿文を作成し、見どころを伝えました。その他、出土品整理や文化財の写真撮影など学芸員に必要な技術を学びました。

実習生からは「資料ごとに取り扱いが異なることを学んだ」、「展示会開催までの工程の多様さに驚いた」といった感想ががかりました。

実習生2名とも、実技の要点がつかめるまで何度も挑戦してみんなど、意欲的に実習に取り組んでいました。



実習の様子（出土品の整理）

戦争の記憶を伝える千人針

～久留米市の戦争資料を大学教育に～

西南学院大学非常勤講師 平川 知佳

西南学院大学国際文化学部では、「戦争を歩く、戦争を記憶する」をテーマに、戦争に関する知識を学び、戦争について考えることを目的とした授業を行っています。

そこで私は、久留米市における「女性たちの銃後活動」に焦点をあてたお話をしました。その中で、久留米市教育委員会所蔵の戦争関連資料を取り上げました。

紹介した資料の中でいちばん学生の興味を引いたのは、千人針が施された腹巻です。びっしりと規則正しく並んだ「玉留め」には、「弾を止める」という意味があり、弾丸よけのお守りになるように、千人がひと針ずつ刺して完成させたとされています。ひと針ひと針に込められた思いを想像すると、胸がいっぱいになります。

私自身は、幼い頃より、祖母や知り合いの方など

から、このような千人針のことをはじめ戦時中の思い出を聞くことができていましたが、今の学生の中には、「千人針を知らなかった」という人も多く、戦争や戦時中の暮らしのことを伝えてくれていた人の存在が、身近でなくなってきたことを感じました。

戦争の記憶を伝承していくためには、「モノ（資料）に戦争の実相を語ってもらうこと」が、これからますます重要になってくると思います。

文化財収蔵館の方々には、これからも戦時中の資料をはじめたくさんの久留米に関する資料を大切に保存していただき、後世に残して欲しいです。



千人針腹巻

寄贈後初公開の絵巻から 久留米藩の豪商に思い馳せる 〜海山名所図会 里帰り

「海山名所図会」は、江戸時代の久留米藩の豪商・手津屋正助（1753〜1823）が所有した絵巻です。近年は市外在住の正助の子孫の下で保管され、令和4年7月に市に寄贈されました（1ページ参照）。絵巻の「里帰り」を受けて、11月4日（金）・5日（土）、手津屋本店跡に程近い田主丸総合支所において、全5巻を一挙公開しました。各日4時間の限定公開でしたが、地域の方々を中心に、2日間で計125名が、今なお色鮮やかに残る絵巻を間近で鑑賞しました。



会場内の様子

絵巻は保存と展示スペースの観点から、複数一度に展示することが難しいのが現状です。長時間光に当ててしまうと、顔料の褪色や剥落が進むおそれがあります。また、横長の形態であるため、複数展示するには広い空間が必要です。そうした制限があるなかで、今回は全巻を一堂にご覧いただくことができました。

絵巻はケース越しではない露出展示とし、会場では自由に写真・動画撮影ができるようにしました。撮影が可能であると知ると、改めて時間をかけて鑑賞する人も多く見られました。来場者からは、

「貴重な資料が見られた」

「色が鮮明に残っていて驚いた」

「こんなにきれいな状態で保管されてきたのだから、今後も大切に保管していくべきだ」

という声が聞かれました。

一方で、

「今後常設などで展示をしてはどうか」

「全体を撮影してパネルなどを作成し、いつでも見られるようにすれば、本物の関心が高まるのではないか」といったご意見もありました。

短い期間ながら、手津屋が地域の人々にとっていかになじみ深い存在であるかを実感するとともに、今後の保存活用の在り方を考えることができ、里帰りの意義を大いに感じられる展示となりました。

■資料収蔵ご協力のお願い

久留米市では、古文書、古記録、古写真、書画、陶磁器などの工芸品、民俗資料など、様々な資料について「文化財収蔵資料」として収集を進めています。対象となるものは、久留米の歴史文化に関わる資料で、「久留米市文化財収蔵資料審議会」による収集方針に基づき、受入れを行っています。

もし今後、次のようなことがありましたら、ぜひご一報ください。

- ・先祖から伝わった古い書類や写真、道具などがある。
- ・片付けをしていたら古いもの（古文書、古美術品、古い書類など）が出てきた。
- ・古い書類や骨董品の保管について心配事がある。

古いもので判断に迷ったときには、廃棄する前にご相談ください。また、ご自宅での歴史的な資料を保管していただく方法についても、ご不明なことがありましたらお尋ねください。

先人たちが紡いできた地域の歴史を後世に伝えていくためにも、皆様のご理解、ご協力をお願いいたします。

【編集後記】

今回初めて収蔵館ニュースの編集を担当しました。実はこの第19号、昨年度のものから4ページ増量しています。寄贈件数の増加に伴い、新収蔵資料の紹介を増やしました。皆様には、本市の収蔵資料と保存活用の取組みについて、より多くの内容をお伝えできたのではないかと感じています。紙面に関するご意見・ご感想、また資料の保存やご寄贈のご相談等、随時受け付けております。今後ともよろしくお願いいたします。

『収蔵館ニュース』第19号

発行年月日 令和5年3月31日

編集・発行 久留米市文化財保護課
久留米文化財収蔵館
〒830-0037
福岡県久留米市諏訪野町 1830-6
電話・FAX 0942-38-6194
E-mail bunkazai@city.kurume.lg.jp

「収蔵館ニュース」前号（第18号）はこちらからご覧になれます。

久留米市ホームページ ➡ <https://www.city.kurume.fukuoka.jp> > 「観光魅力・イベント」 > 文化財・歴史 > 刊行物の案内 > 【配布物】収蔵館ニュース